

法華經の一乗思想三乗説に対する構造機能分析

——華嚴十地におけると法華一乗におけるとの比較対照（関係図式）——

伊 藤 瑞 叡

第一節 問題の所在

アリストテレスは「すべての科学に普遍的に妥当する方法はなく、個別の科学はその対象に応じてそれ自体に固有の方法を活用するべきである」と言明している。¹⁾

J・M・ボヘンスキーは *Wage zum philosophischen Denken* という小著で、「しからば哲学は他の諸科学とどのような点で区別されるのか。ともあれ哲学は認識の多くの方法のいずれをも使用できるといふ点、すなわちその方法 (Method) において区別されよう。また哲学はある対象を考察する場合に他の諸科学によってそれ以上に問われることなく前提として容認するところで問い、その限界の、根本的様相の立場から観察し、対象の根柢へと深く進むという点、すなわち観点 (Gesichtspunkt) において区別されよう」と述べている。²⁾

仏教古典学の基本となる観点と方法については、拙著『法華菩薩

道の基礎的研究』の序に私見を提示した所である。³⁾ よって省略する。参照されたい。

本論は、大乘經典の内容研究の（観点と）分析方法に関する試論である。すなわち、思想の内容の構造と機能を可能な限り全的かつ合目的に解析して明示することを目的とする。よって、内容の詳細には及ばない。

すなわち、考察の次第と結論は、『増補 華嚴菩薩道の基礎的研究』（平成二十五年 国書刊行会）の本論第五章第二節、『法華菩薩道の基礎的研究』の第四篇第一章による。往見されたい。⁴⁾

第二節 分析の方法

『摩訶止観』には、十乗観法の対象として十種の観境、すなわち十境が説示される。その第九が二乗境であり、第十が菩薩境であつて、いわゆる一乗思想三乗説を観境とする。

なおシナ仏教において、三論の嘉祥や唯識法相の慈恩の如き三車

(二乗) 家と天台の智顛・華嚴の法蔵の如き四乗 (四乗) 家とが、菩薩乘 (牛車) と一仏乘 (大白牛車) との同別を論じて対立するのも、この一乗思想三乗説をめぐってのことである。

日本仏教においても、最澄と徳一 (△得一) との三一権実論争があつて、一乗思想三乗説を論題とする。

ここで一乗思想三乗説と称するのは、一乗の教説が三乗の教説を前提として成立し、三乗の教説を意義あらしめて、それとの関係において思想として完成した、と見られることによる。

ともに、円教とされる別教一乗の華嚴経と同教一乗の法華経との一乗思想三乗説については、已に『華嚴菩薩道の基礎的研究』第七章第四節・『法華菩薩道の基礎的研究』第四篇第一章において比較研究したところであり、その同異は多少なりとも明証せられたところである、と思う。

しかし、今にして思うに不充分である。対象を観照 (Schauen) し理解 (各要素を見分け区別) し、解釈 (Auslegung) して、その部分に従つて記述する文上の形状分析にとどまつてしまつたからである。

すなわち、思想内容に対する構造分析による論理的構造の明証と機能分析による理念的意趣の追究に欠くところあり、と反省するからでもある。

よつて、ここでは、二經の一乗思想三乗説の各内容構造を判明

(distinct) ならしめ、両概念 (concept △ 概念作用 conception) の相違点を明晰 (clear) ならしめるために、すなわち、その結論より転じて、再考を加えて、両者の内容概念の構造関係 (構造機能分析) を図式化して明示したい、と思う。

ことに構文論的 (syntaktisch) と語用論的 (pragmatisch) と意味論的 (semantisch) との諸関係に分析して、成語・概念の諸関係を構造・機能の全体として総合する方法を試行する。

ここで、構造機能分析 (Structural-Functional-Analysis) とするのは、パーソンの社会システム論⁽⁶⁾でいうそれを仏教古典学に適用してのことである。

すなわち、思想内容の論理的構造、その機能としての理念的意趣を把握することを目的として、それに合目的であるように分析することである。

別言すると、形状分析にとどまることなく、構造分析によって論理的構造を明証 (理解) し、機能分析によって理念的意趣を追究 (洞察) するのである。

一点 (に) 集中 (して) 豪華 (に資料を提示する) 主義による、網状 (に) 増加 (せしめて) 認識 (して事足りりとする) 傾向を転じて、構造・機能 (の諸) 関係 (を) 分析 (すること) による、全体 (を) 総合 (している) システム (を) 理解 (すること) を試行したい、と思う。

すなわち、収集・分類・認識・熟知より観照・分析・理解・洞察へと向かう、のである。

かくして、そのために、一乗思想三乗説の構造を分析し総合し批評する規準ないし補助線となる媒介的概念として、世親の『十地経論』(Dasa-bhūmika-vyākhyāna)の所見により、縁起の順逆両観、

すなわち苦の生へと向かう順観 (anuloma-pratyaveksana 一切相智分別観) 一切の行相に関する観察)・苦の滅へと向かう逆観 (pratiloma-p. 厭離有為観) 有為を厭離する観察)・順逆和合観ともいうべきもの (大悲随順観) 悲に随順しての観察)・真俗二諦の安立、すなわち(三界即唯心にも対応される)勝義諦の安立 (paramārtha-satya vyavasthāna 第一義諦差別)・(十二有支皆依一心にも対応される)世俗諦の安立 (samvṛti-s.v. 世諦差別) を、あるいは『中辺分別論』の三性説 (parikalpita, paratantra, pariniṣpanna) を、それぞれ適用する。

すなわちには、あるいは、ヘーゲルの三つ Vernunft (理性)・Verstand (悟性)⁽¹⁰⁾、ベルクソンの三つ直観と分析、オットー・シュトラウスの三つ Einheit (一)・Vielfheit (多)・Sein (存在)・Werden (生成)⁽¹¹⁾ などをも、それぞれ適用する。

すなわち、第三節の図式のNo.4菩薩乗と一仏乗、No.5一乗と三乗との関係が、それである。

なお、法華経においては、Saddharmaたる仏知見 (tathāgata-

jñāna-darśana)と随宜所説意趣 (Samdha-bhāṣya)⁽¹²⁾を、No.5一乗と三乗との関係を総合する根本概念 (die Grundbegriffe)として適用する。

また、機能、分析する規準として、カントの形式論理学の抽象概念に関する、状態 (Modalität)・性質 (Qualität)・関係 (Relation) というカテゴリー (範疇)⁽¹³⁾をも適用する。悟性の先天的形式 (判断表) 四の中、分量 (Quantität) を除く。

すなわち、図式のNo.1三乗(と一乗)の一般的特徴が、性質のカテゴリーに相当する。

No.2三乗に相応する衆生の資質、対告の衆生の資質(=機根)と説示の法門の内容(=所説)が、関係のカテゴリーに相当する。

そして、No.3三乗(と一乗)において修せられるべきものは、性質と関係を総合する状態のカテゴリーに相当する。

なお、法華経においては、法華経におけるSaddharmaの三義、教法 (pravacana-dharma)・(修)行法 (pratipatti-dh.)・証(得)の法 (prāpti or adhiḡama-dh.)を分析のカテゴリーとして適用する。

かくして、構造機能分析による関係図式の提示にいたる方法次第を十項にまとめると、左の如くなる。

(1) 対象文献を解読し意味論・語用論・構文論の関係より観察する。

(2) 分析の対象となる思想を内包する原文を摘出する。

- (3) 原文に即して各命題 (preposition. Satz || 言語によって表示された判断、主辞・賓辞・繫辞^{けいじ}よりなる) に分割する。
- (4) 各命題中の概念の相互が反対 (Contrary concept) 関係か矛盾 (Contradictory concept) 関係か上下二位 (Superordinate concept・Subordinate c.) の何れか等を弁別する。
- (5) 諸命題を前提・条件・原因より後提・帰結・結果へと論理化して再構成する。
- (6) 学際的にも普遍妥当して比較規準となりうる内外の媒介概念を適用して分析する。
- (7) 比較經典学の見地より他經典の同一思想についても同様に分析して比較の対象とする。
- (8) 両者を関係図式化して比較対照する。
- (9) 重ねて分析し総合する。
すなわち、各々の命題における根本概念 (主辞の) と重要用語 (賓辞の)、その構造 (繫辞の) における位置と機能としての役割を確定する。
- (10) 図式化して明示する。

第三節 華嚴十地における一乘思想三乘説の構造機能関係図式

係図式

かくして『華嚴菩薩道の基礎的研究』の「本論 華嚴・十地菩薩

思想とその展開、第五章 十地思想における関連問題の研究、第二節 十地における一乘思想三乘説」の所論（五九五―六一頁）を再考⁽¹⁵⁾して、十地における一乘思想三乘説を構成する属性概念の構造機能を前述せるところの方法をもって分析し、その関係図式を作成すると、左の如くなる。

※ 尚^{なを}、筆者は、何故に、かような比較とか適用とかいう研究の新作法を試行するのか。

十項にまとめると、左の如し。

- (1) 西洋哲学との出会いは、私ども仏教研究者の思想上と方法上の成熟にとつて重要な意味があるのではないか。
- (2) 仏教古典学と西洋古典学とは一緒に成熟しなければならないのではないか。
- (3) 普遍的な価値の追究の所産としての西洋哲学と特殊な価値の追究の所産（人文宗教としての倫理的理想主義 Ethical Idealism）としての仏教思想との比較は、可能であり一理あるのではないか。
- (4) 西洋哲学との比較によって、仏教古典への信頼を強化することができる。
- (5) 仏教古典の思想哲学を近代的西洋的な思想哲学概念をもつて補強することができる。

- (6) 西洋哲学になじんでいる今日の一般的知識層としての読者にも仏教古典を理解せしめることができる。
- (7) 仏教古典思想の真実の理念と構造を近代的センスによる新しい状態で表現(△図解)してみる。
- (8) 仏教の一知識人としての自分の思想意識を世界の思想の中で確認してみる。
- (9) 研究者としての自分の立場を世界の思潮の中で何とか位置付けてみる。
- (10) かくして、筆者の仏教古典への憧憬(long for)は、仏教の学徒の領域から超出して一種の正道のイズムならざるイデオロギーにまで脱皮するのかもしれない。

(これら十不善業道を受行するが故に)
 āyante (地獄・畜生・鬼世界の諸趣が施設される)

道を受行するが故に)
 初めとして)
 prajñāyante (乃至有頂までの受生が施設される)

śrāvaka-yānaṃ saṃvartayanti (般若の行相によって修習されるとき→声聞乗を成ぜしめる)

心によって)
 yā (三界を怖れる心によって)
 の欠如によって)
 (他より pudgala-nairātmīyāvavāda 人無我の教授を聞くに随行するによって)
 するによって)

pratyekabuddha-yānaṃ saṃvartayanti (般若の行相によって浄化されるとき→独覚乗を成ぜしめる)

ā (他に導かれることなく)
 ukūlatayā (自然性に随うことによって)
 bodhanatayā (自ら正覚を成ずることによって)
 gaṇatayā (他より求めることなくして)
 vikalatayā (大悲・方便の欠如 (= 説法をしないこと) によって)
 tyānubodhanena (甚深なる此縁性を随覚することによって)

若によって浄 → bodhisatva-bhūmi-pariśuddhyai
 化されるとき) (菩薩地を浄化するために) } caryā-vipulatvāya saṃvartante
 yā pāramitā-pariśuddhayai (廣大なる行を (= のために) 成ずる)
 をもって) (波羅蜜を浄化するために)
 tayā (大悲を具えることによって)
 mṅghītatayā (善巧方便の摂受することをもって)
 prañidhānatayā (大願に善結されることによって)
 āgatayā (一切の衆生を捨てないことによって)
 lādhyālabhanatayā (仏智の廣大なるを觀慮することによって)

の行相によって浄化されるとき) → daśabala-balatvāya (十力者の力なるものを)
 dhitatvāt (一切種にて浄化されるとき) sarva-buddha-dharma-samudāgamāya saṃvartante (一切の仏法を証成することを成ずる)

No.1 三乗（と一乗）の一般的な特徴（機能分析Functional-Analysis——性質Qualität）

法華經の一乗思想三乗説に対する構造機能分析（伊藤）

-gatayaḥ prajñāyante （諸趣が施設される）	eṣāṃ daśānāṃ akuśālānāṃ karma-pathānāṃ samādāna-hetor niraya-tiryag-yoni-yama-loka-gatayaḥ prajñ-	
manuṣya-yāna（人乗） deva-yāna（天乗）	daśānāṃ kuśālānāṃ karma-pathānāṃ samādāna-hetor（十善業 manuṣyōpapattim ādi kṛtvā（人への受生を yāvad bhavāgram ity upapattayaḥ	
śrāvaka-yāna（声聞 乗）	tata uttaraṃ（それより以 上に） （daśa kuśalāḥ karma- pathāḥ 十善業道は）①	prajñākāreṇa paribhāvyamānāḥ → ③ ② ├── pradeśika-cittatayā（狭劣なる ├── traidhātukōttrasta-mānasata- ├── mahā-karuṇā-vikalatayā（大悲 ├── parataḥ śravaṇānugamena └── ghoṣānugamena（音声に随行
pratyekabuddha-yāna（独覚乗）	tata uttara-taraṃ（それよ り、より以上に） （daśa kuśalāḥ karma- pathāḥ 十善業道は）①	(prajñākāreṇa) pariśodhitā(ḥ) → ③ ② ├── apara-praṇeyatay- ├── (svayambhūtvān- ├── svayam abhisam- ├── (parato 'parimār- ├── mahā-karuṇōpāya- └── gambhīrēdampra-
bodhisatva-yāna（菩薩 乗）	tata uttara-taraṃ（それよ り、より以上に） （daśa kuśalāḥ karma- pathāḥ 十善業道は）①	(prajñākāreṇa) pariśodhitā(ḥ)（般 ③ ② ├── vipulāpramāṇata- ├── (廣大無量なること ├── mahā-karuṇōpeta- ├── upāya-kauśalya-sa- ├── sambaddha-mahā- ├── sarva-satvāparity- └── buddha-jñāna-vipu-
(buddha-yāna 仏乗)	tata uttara-taraṃ（それよ り、より以上に） （daśa kuśalāḥ karma- pathāḥ 十善業道は）①	(prajñākāreṇa) pariśodhitāḥ（般若 ③ ② sarv'ākāra-pariśo-

七

No.2 三乘に相応する衆生の資質 (機能分析 Functional-Analysis — 関係 Relation)

yāna (乗)	対告の衆生の資質 (機根)	説示の法門の内容 (所説)
śrāvaka-yāna (声聞乗)	yatra sattva hīna-citta dīna-māna-niratās (およそ衆生あつて心劣り意弱きに傾くならば) tatra vidu śrāvaka-cari deseti vīśabhi/ (そのときには牛王なる賢者は声聞の行を示す)	
pratyekabuddha-yāna (独覚乗)	yatra sattva tikṣṇa-citta pratyayāna niratās (およそ衆生あつて心鋭く縁覚乗を樂うならば) tatra jñāna pratyayāna darśayanti virajā (そのときには無塵なる者は縁覚乗の智を説く) //10//	
bodhisattva-yāna (菩薩乗)	ye tu sattva hīna-maitra-manasā (abhīratās) (しかし衆生あつて利益・慈との意を求むるならば) tatra iyaṃ jīna-putrāna darśayanti caraṇam (そのときには此の仏子の行を説く) /	
buddha-yāna (仏乗)	ye tu sattva agra-śreṣṭha-matī-māna-niratās (しかも衆生あつて最上最勝なる慧の意を求むるならば) tatra ami buddha-kāya darśayanti atulam (そのときには此の無比なる仏身を説く) //11//	

EB, Vol. VI, No.1, p.69, 11.5-12.

* 仏乗 (buddha-yāna) とは仏身 (buddha-kāya) を説くものである、と知られよう。

* 究極の仏身 (= 本極法身) とは何か？

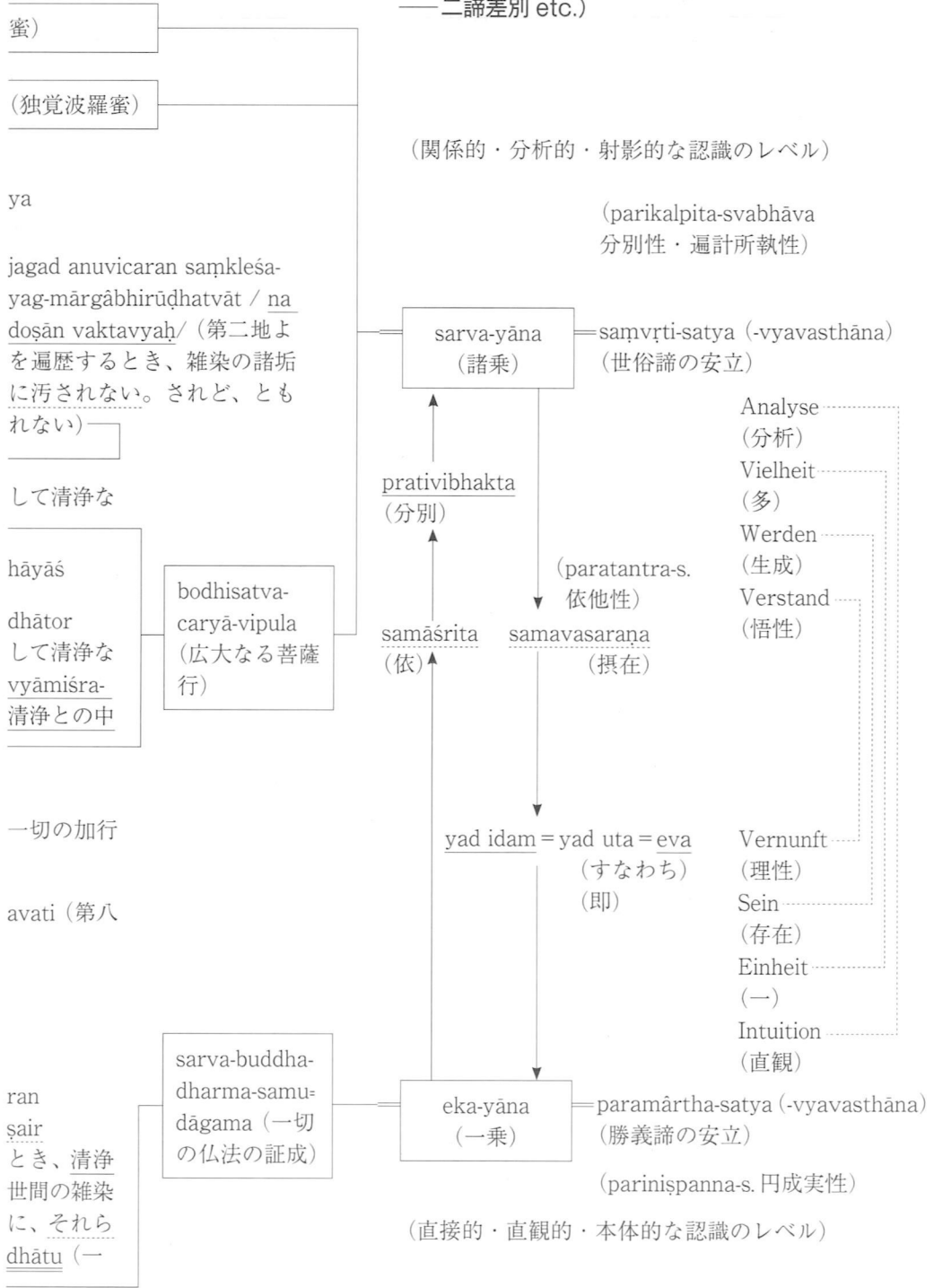
* 熏承事に云く、寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初その初より以来此上有縁深厚本有無作三身の釈尊是れなり云々。弥三郎許御書に云く、無始色心本是理性妙境妙智金剛不壞 (△不滅) の仏身云々。本尊抄に云く、我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり云々。

No.3 三乗（ヒ一乗）において修せられるべきもの（機能分析 Functional Analysis — 状態 Modalität）

<p>śrāvaka-yāna (声聞乗)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ apramāṇaṃ śrāvaka-yāna-niryāṇādhimukti-nānātvam avatarati (無量なる声聞乗の出離の信解の種々相に入る) ③ ● śrāvaka-yāniyāśrayān avabhāsyaniti (声聞乗の依身を照す) ③ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ apramāṇaṃ buddhānaṃ bhagavatāṃ mārga-desanāvatarāṃ avatarati (無量なる諸仏世尊の(八正)道の説示の証入に入る) ①②③ ● dharmaloka-mukham cōpasanṅharanti (法の光明門を教授する) ①②③
<p>pratyekabuddha-yāna (独覚乗)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ apramāṇaṃ pratyekabuddha-yāna-samudāyama-nispattim avatarati (無量なる独覚乗の証成の成就に入る) ③ ● pratyekabuddhāśrayān avabhāsyaniti (独覚乗の依身を照す) ③ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ apramāṇaṃ buddhānaṃ bhagavatāṃ gambhīra-jñāna-mukha-praveśa-nirdeśāṃ avatarati (無量なる諸仏世尊の甚深(なる縁起の)智門への証入の説示に入る) ①②③ ● śānti-samādhī-mukha-nayaṃ cōpasanṅharanti (寂靜三昧門の理趣を教授する) ①②③
<p>bodhisatva-yāna (菩薩乗)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ bodhisatvānaṃ bodhisatva-caryā-prayogaṃ avatarati (諸菩薩の菩薩行の加行に入る) ② ● prathama-cittotpādāṃ upādāya yāvan navanīṇaṃ bhūmiṃ anuprāptān bodhisatvān avabhāsyaniti (初発心より第九地に到れる菩薩を照す) ② 	<ul style="list-style-type: none"> ○ apramāṇaṃ buddhānaṃ bhagavatāṃ mahā-yāna-samudāyāvatarā-nirdeśānaṃ avatarati (無量なる諸仏世尊の大乗の集成の証入の説示に入る) ①②③ ● prajñōpāya-kausalya-nayaṃ cōpasanṅharanti (般若七方便の善巧なるこの理趣を教授する) ①②③
<p>(buddha-yāna) (仏乗)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● abhiṣeka-bhūmi-prāptān bodhisatvān avabhāsya (灌頂地に到れる諸菩薩を照して) ①② 	<ul style="list-style-type: none"> ● tat-kāyeṣv evāstaṃgacchanti (灌頂地に到れる諸菩薩の身中に没入する) ③

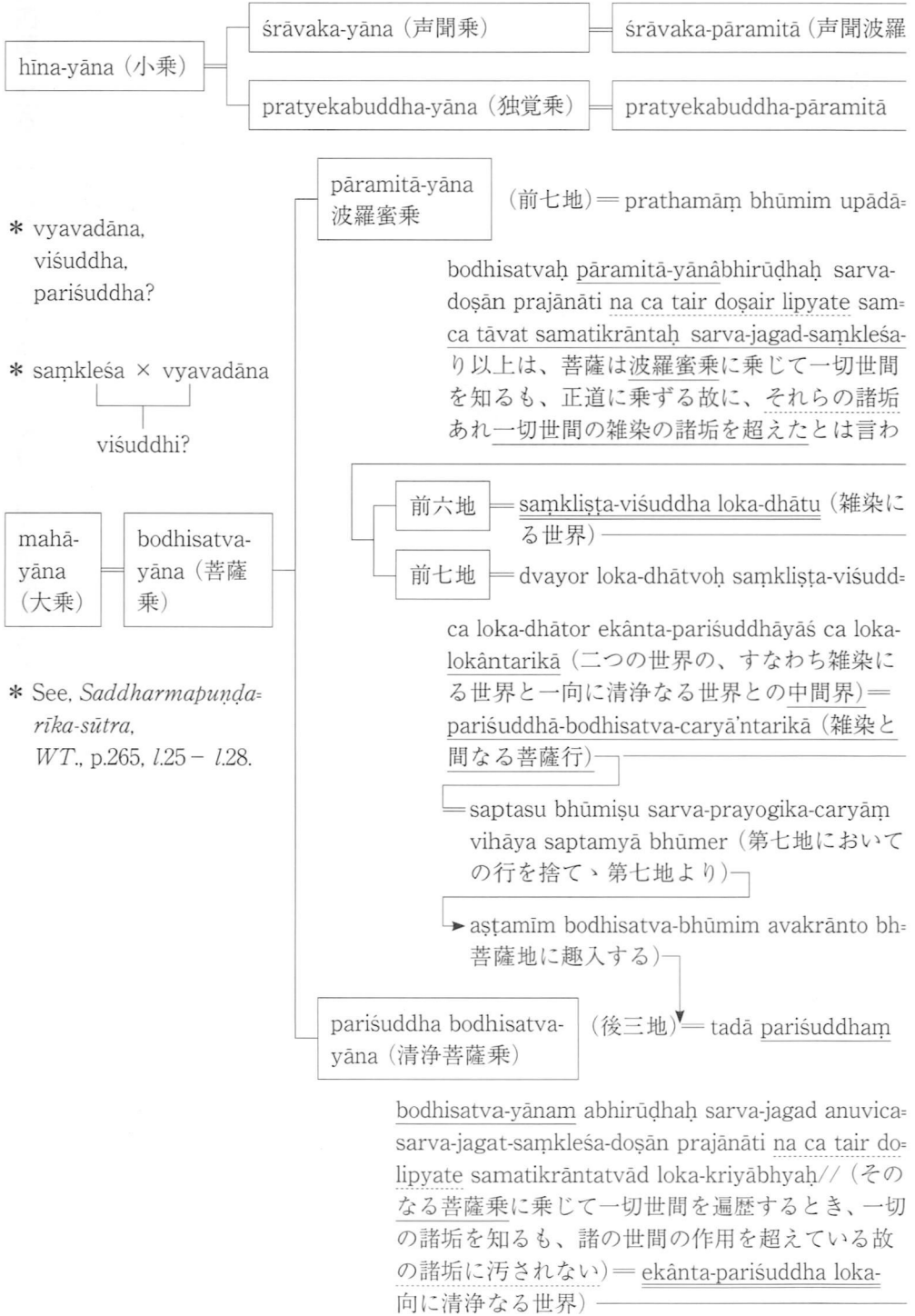
- *Rd.*, p.56, *ll*.11 – 15. ○ *Rd.*, p.83, *l*.30 – p.84, *l*.7. (~ *tasya bodhisatvasya samanantara niṣaṅgasya tasmin mahā-ratna-rāja-padme*……*daśa-raśmy-asamkhyeya-śata-sahasraṇi niścaraṇti niścarya*……*ūrṇa-kośād*……) ① *pravacana-dharma*, ② *prātipatti-dh.*, ③ *prāpti or adhigama-dh.*

No.5 一乗と三乗との関係 (構造分析 Structural-Analysis
— 二諦差別 etc.)



No.4 菩薩乘における波羅蜜乗と清浄菩薩乗 (構造分析 Structural-Analysis)

法華經の一乗思想三乗説に対する構造機能分析 (伊藤)



第四節 法華一乘における一乘思想三乘説の構造機能関係図式

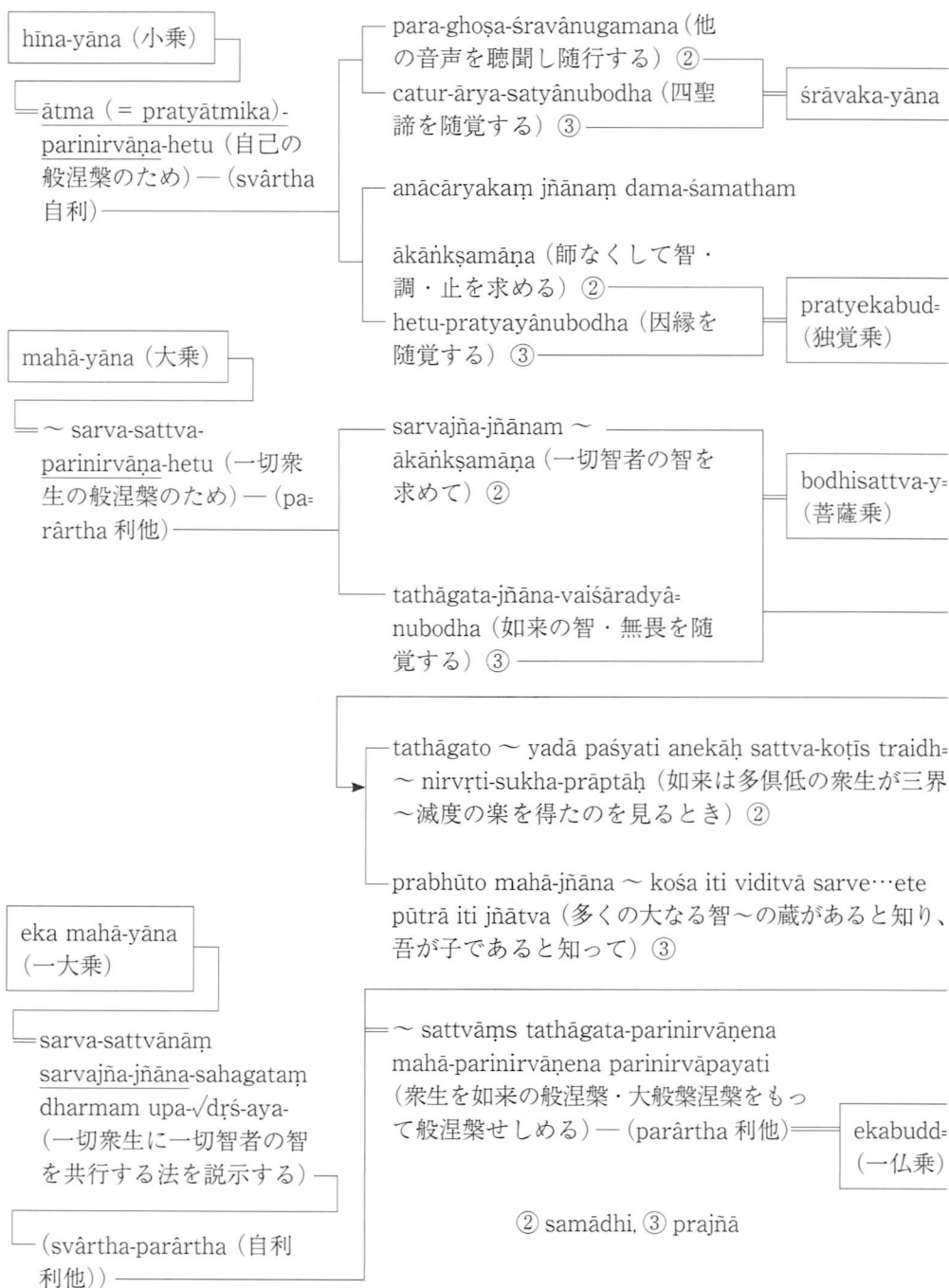
ついで、『法華菩薩道の基礎的研究』の「第四篇 法華経の諸問題の研究、第一章 比較経典学より見たる一乘（思想）三乘説、二 法華経における一乘（思想）三乘説」の所論（六一九―六四二頁）を再考して、法華経における一乘思想三乘説を構成する属性概念の構造機能を前述の方法をもって分析し、その関係図式を作成すると、左の如くなる。



WT., p.74, l.16 - p.76, l.24.

No.1 三乗(と一乗)の一般的な特徴(機能分析 Functional-Analysis — 性質 Qualität)

法華經の一乗思想三乗説に対する構造機能分析(伊藤)



<p><u>ta-nirvṛtiṃ,</u> ṣave 'ti//9// が苦の終りである、と</p>
<p>nti teṣāṃ, <u>ma-netrīm//10//</u> の法眼〈=教法〉を讚</p>
<p>varṇaṃ//11// して説く)</p>

//.10 – 15 etc.

rma (行法)	prāpti- or adhigama-dharma (証法)
<p>なすべきこと) yā (梵行) satya- samprayukta dharma 係する法)</p>	<p>・ kṣiṇ'āsrava (漏尽) ・ nirvāṇa (涅槃) ・ jāti-jarā-vyādhi-maraṇa ~ duḥkha-daurmanasyô- pāyāsānāṃ samatikrama (生老病死~苦・憂・悩を超度する)</p>
<p>mutpāda-pravṛtta dharma する法)</p>	
<p>ā (六度) mitā (般若波羅蜜)</p>	<p>・ tathāgata-jñāna (如来智) ・ sarvajñā-jñāna (=anuttarā samyak-saṃbodhi) (一切智〈者の〉智 = 無上正等正覺)</p>
<p>na-paryavasāna dharma 究竟とする法)</p>	

No.2 三乗に相応する衆生の資質 (機能分析 Functional-Analysis——関係 Relation)

yāna	対告の衆生の資質 (機根)	説示の法門の内容 (所説)
śrāvaka-yāna (声聞乗)	duḥkkena sampiḍita ye ca sattvā, jāti-jarā-khinna-manā ajānakāḥ/ (およそ苦に悩まされ、生老を心中に厭 う無知なるところの諸衆生あり) WT., p.7, ll.16-17	teṣāṃ prakāśanti praśān- duḥkhasya anto ayu bhik- (彼等に、比丘らよ、これ 言って寂滅涅槃を説く) p.7, ll.18-19
pratyekabuddha- yāna (独覚乗)	udāra-sthāmādhigatās ca ye narāḥ, puṇyair upetās tatha buddha-darśanaīḥ (およそ勝妙なる勢力を獲得し、見仏す るといふ福德を得たところの人々あり) p.7, ll.20-21.	pratyeka-yānaṃ ca vada- samvarṇayanto ima dhar- (彼等に独覚乗を説き、こ 歎する) p.7, l.22 - p.8, l.1
bodhisattva-yāna (菩薩乗)	ye cāpi anye sugatasya putrā, anuttaraṃ jñāna gaveṣamāṇāḥ/ vividhāṃ kriyāṃ kurviṣu sarva-kālaṃ, (およそ無上の智を求め、常に諸種の所 作を修するところ他なる善逝の諸子あり) p.8, ll.2-4.	teṣāṃ pi bodhiya vadanti (彼等に菩提について讚歎 p.8, l.5
buddha-yāna (仏乗)		

No.3 三乗(と一乗)において修せられるべきもの (機能分析——状態) WT., p.16.

yāna	dharma	pravacana-dharma (教法)	pratipatti-dha-
śrāvaka-yāna (声聞乗)	<ul style="list-style-type: none"> ・ nirvāṇa-paryavasāna (ṃ ~ deśayati) (涅槃を究竟とする法を説く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ catur-ārya-satya-saṃprayukta (ṃ ~) dharma (ṃ deśayati) (四聖諦に關係する法を説く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ kṛtya (所作、) ・ brahma-car- ・ catur-ārya- (四聖諦に関
pratyekabuddha- yāna (独覚乗)		<ul style="list-style-type: none"> ・ pratītya-samutpāda-pravṛtta (ṃ) dharma (ṃ deśayati) (縁起に発勤する法を説く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ pratītya-sa- (縁起に発勤
bodhisattva-yāna (菩薩乗)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ṣaṭ-pāramitā-pratiṣamīyukta (ṃ ~) dharma (ṃ deśayati) (六度に關係する法を説く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ṣaṭ-pāramit- ・ prajñā-pāra- 	
buddha-yāna (仏乗)	<ul style="list-style-type: none"> ・ sarvajña-jñāna-paryavasāna (ṃ) dharma (ṃ deśayati) (一切智者の智を究竟とする法を説く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ sarvajña-jñā- (一切智智を 	

(菩薩は吾等は乗を得たものになりたいと〈願って〉
歡喜心をもって〈宝飾のみこしを〉布施として与え
それを無上の菩提へと廻向する)

(善逝が三界において最勝なるものとして

殊別される乗なりと讚歎して

仏乗を速かに得るものになりたい

と布施を行ずる)

p.8, //19-21

(精進に住する時那の子あり

精進・戒・忍～

禪によって智慧によって無上の菩提に発趣する)

p.11, //2-21, p.12, //15-22.

(三界において最勝なるものとして殊別される乗)

(無上の菩提へ廻向するも)

p.8, //20.

p.30, //19-22

No.4 菩薩乗と仏乗 (構造分析 Structural-Analysis)

<p><u>bodhisattva-yāna</u> (菩薩乗)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ dadanti dānāni prahr̥ṣṭa-mānasāḥ/ pariṇāmayanto iha <u>agra-bodhau</u> vayaṃ hi yānasya bhamema lābhinaḥ//15// traidhātuke śreṣṭha-viśiṣṭa-yānaṃ yad <u>buddha-yānaṃ</u> sugatehi varṇitaṃ/ ahaṃ pi tasyo bhavi kṣipra-lābhī dadanti dānāni im' idṛśāni//16// ・ vīrye sthitāḥ ke-ci jinasya putrā vīryeṇa ~ śīlena ~ kṣāntyā ~ dhyānena ~ prajñāya te prasthita <u>agra-bodhim</u>//42//
<p><u>buddha-yāna</u> (仏乗)</p>	<p>= traidhātuke śreṣṭha-viśiṣṭa-yāna ((viśiṣṭa-cāritra 上行))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ pariṇāmayanto iha <u>agra-bodhau</u>
<p><u>agra-bodhi</u> (最上菩提 = 無上菩提)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>aprimeya buddha-jñāna</u> = tathāgata-dharma (無量の仏智 = 如来法) — tasya (= <u>agra-dharmāṇa</u>) bhūta (ṃ <u>parijāni</u>) artha (ṃ)//13// (最上法の真実義を遍知する)

mahôpâya-kausalâya-jñâna-darsana-parama-pâramitâ
 を有する知見の最勝波羅蜜)

la-vaiśaradya
 畏)

saṃdhā-bhāṣya (= bhāṣita) (隨宜所說意趣)

uśalya-jñâna
 智)

diśena nirdiśanti (WT., p.40,
 説示する)
 mī (p.37, l.22)
 tra, Rd., p.49, l.9)

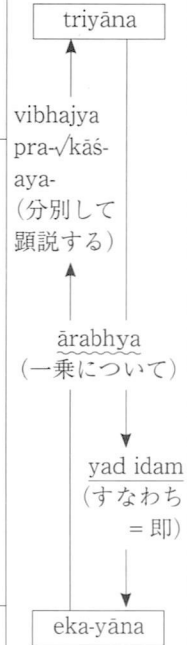
triyāna (-nirdeśa)
 (三乘)
 yad idam (即)
 eka (buddha-) yāna
 =eka mahā-yāna
 (一仏乘)

traidhātuka (三界)
 yad idam (即)
 citta-mātra (唯心)

prakāśayeyam//118// (p.54,
 であろう)
 prakāśayāmah/ ll.15-16)
 する)
 hyātāni (tāni)
 心に依る)

triyāna
 (三乘)
 vibhajya pra-√kāś-aya-
 (分別して顯説する)
 ārabhya/ diś-aya-
 (一乗について説く)
 eka (buddha-) yāna
 (一仏乘)
 =buddha-bodhi
 (仏菩提)
 =parama pada
 (第一の立場)

dvadaśa bhavāṅgāni
 (十二有支)
 prabhedaśo vyākhyāta
 (分別して演説される)
 samāsrita
 (依る)
 eka-citta (一心)



ta-niścayam//48// (p.42,
 実の確認を説く)
 ram//129//
 agra-dharmam/
 dhim//130// (p.55, l.26
 して無上の法をわれが説くべ
 せり、今やこゝに、無上の菩
 薩
 ān mahā-yānenāiva sattvān
 衆生を般涅槃せしめる)

pūrva samaya (前時)
 upāya-kausalāya bahu-prakāra dharma jinān
 (多種の善巧方便の勝者の法)
 trīṇi yānāni upa-√drś-aya-
 (三乗を説示する)
 pāśca samaya (後時)
 √vad bhūta-niścayam
 pra-√kāś-aya agra-bodhim
 (無上の菩提を顯説する)

No.5 一乗と三乗との関係 (構造分析 Structural-Analysis)

法華經の一乗思想三乗説に対する構造機能分析 (伊藤)

<p>jñāna ←→ saṃdhā-bhāṣya 智 隨宜所説意趣</p> <p>△ satya △ praty- avekṣaṇa</p>	<p>tathāgata-jñāna-darśana- (仏知見 = 大なる善巧方便)</p> <p>tathāgata-jñāna-ba- (如来の智・力・無)</p> <p>upāya-ka- (善巧方便)</p>
<p>△勝義諦の 安立 (paramārtha- satya- vyavasthāna)</p>	<p>△順逆和合観 = 大悲隨順観 (三乗の滅へと 向う逆観 = 厭離有為観) (pratiloma- pratyavekṣaṇa) (絶対的知識)</p> <p>○ ~ upāya-kausalyena tad evāikaṃ buddha-yānam tri-yāna-nir- II.3-4) (善巧方便をもって、彼の一なる仏乗を三乗の説示によって、 ○ ekam evāham...yānam ārabhya sattvānāṃ dharmam desayā- (実は一乗について衆生に法を説く) ○ ekam evēdaṃ...yānam yad idaṃ buddha-yānam (p.40, I.22) (乗は此の一つのみ、即ち仏乗である) △ citta-mātram idaṃ yad idaṃ traidhātukaṃ (Daśabhūmika-sū- (此の三界に属するものは即ち唯心である)</p>
<p>△世俗諦の 安立 (saṃvṛti- satya- vyavasthāna)</p>	<p>△順逆和合観 (三乗の生へと 向う順観 = 一切 相智分別観) (anuloma- pratyavekṣaṇa) (相対的知識)</p> <p>○ ~ yaṃ nūm'ahaṃ pi ima buddha-bodhiṃ, tri-dhā vibhajyēha II.5-6) われも亦、今こゝに此の仏の菩提を三種に分別して顕説する ○ vyaṃ pi buddhā paramaṃ tadā padaṃ, tri-dhā ca kṛtvāna (われも亦、第一の立場を正覚したとき三種となして顕説 △ yānimāni dvādaśa bhavāṅgāni tathāgatena prabhedaśo vyāk- api sarvāny eva(eka-)citta-samāśritāni (Rd., p.49, I.10) (如来によって分別して説かれた此等の十二有支なるものも一</p>
<p>△順逆和合観 (三乗の滅へと 向う逆観 (pratiloma- pratyavekṣaṇa) (通俗的時間)</p>	<p>○ ~ so'yaṃ kṣaṇo adya kataṃ-ci labdho, vadāmi yenēha ca bhū- II.12-13) (今、ようやく適時が得られた、そのことによって、こゝに真 ○ ~ yehi śruto dharma jināna āsit, upāya-kausalya bahu-prakā- tato mamā etad abhūṣi tat kṣaṇam samayo mamā bhāṣitum yasyāham arthaṃ iha loki jātaḥ, prakāṣayāmi tam ihāgra-bo- -p.56, I.4) (多種の善巧方便の諸勝者の法 (= 三乗) を聞いた者たちに対し その時であると思念して、われはそのために今や世に出現 提を顕説する) ○ pūrvam upāya-kausalyena trīṇi yānāny upadarśayitvā paśc- parinirvāpayati/ (p.76, II.19-20) (初めに善巧方便をもって三乗を説示して後に大乘をもって諸</p>

第五節 華嚴十地におけると法華一乗におけるとの「一乗と三乗との関係」の比較対照

かくの如くして（妙法Saddharmaの三義の中、菩薩道Bodhisattva-caryaたる行法prātipatti-dharmaとしての乗ないしは）一乗と三乗との関係は如何を問題として、その結論の要中の要を摘示すると、左の如くなる。

一乗とは、十地経では、菩薩乗中の前七地たる波羅蜜乘（paramitayāna）に不一であり後二地たる清淨菩薩乘（parisuddha bodhisattvayāna）に不異であり、十力者の力と一切の仏法の証成とを成ずるものとして菩薩乗と不二不異であり、菩薩乗と根柢において連続性をもつ。

法華経では、大乘¹菩薩乗（という相対的なもの）に対して唯一の大乗（eka mahā-yāna）²仏乗（buddha-yāna）（という絶対的なもの）であって、如来（のと同）の般涅槃をもつて般涅槃せしめるものであり、大乘菩薩乗と直接的な連続性をもつ。

三乗とは、十地経では、一乗が分別せられた（prativibhaktā）ものであるから、義としては異種性であるが、法性としては（世俗的には一乗に依り、samāsrita勝義的には一乗に即、yad idamであつて）無差別性として一乗に攝在（samavasāraṇa）する。

法華経では、一乗について（ārabhya）分別して顯説（vibhajya prāvṛkās）される方便としての隨宜所説（bhāṣya）であるから、一乗に即（yad idam）であつて、一乗を意趣（samudhā = abhiprāya 真意）としてその一乗へと止揚されるべきものである。

したがって、一乗と三乗との関係は、十地経では理論的・抽象的であるが、法華経では実践的・具体的である、といえよう。

これは、思想的には法華のが先行形態で十地のが後続形態であることを暗示する。

またシナ華嚴教学が華嚴一乗を別教一乗、法華一乗を同教一乗となしたところの所以をも示唆する。

しかし、華嚴十地におけると法華一乗におけるとの（一乗思想三乗説の二つの構造機能分析による関係図式の）比較対照によって、総合的な体系として、両者の概念の内容がより判明となり、概念の相違がより明晰となるであろう。

すなわち、結論として、構造機能分析におけるAGIL図式を改変して適用し、もつて華嚴十地におけると法華一乗におけるとの一乗と三乗との関係を比較対照して、明示しよう。

縦軸の上位を十二有支（dvādasā bhavaṅgāni）、下位を一心（ekacitta）となし、直面して横軸の左位を輪廻（saṃsāra）、右位を涅槃（nirvāna）となす。

すなわち、十二有支（dvādasā bhavaṅgāni）を外部的（＝偶有的）

もしくは手段的(＝当分的)、一心(eka-citta)を内部的(＝本質的)もしくは目的的(＝真实的)、輪廻を外部的もしくは手段的、涅槃を内部的もしくは目的的と比定する。

ただし、外部的と内部的とは、形式論理学を想起すると、偶有的(accidental)と本質的(essential)とに、また法華(の)教(相)学を適用すると、大小相對に、手段的と目的的とは、法華教学では權(＝当分の方便)と実(＝跨節の真实)とに、それぞれ換言できるだろうからである。

かくして、左の如き図式が可能となるであろう。

これにAGIL図式の基本二軸(＝外部的と内部的という軸と手段的と目的的という軸)を適用する。

すなわち、ekayāna(一乘)は、I機能(＝内部的で目的的な、すなわち本質的で真实的な機能要件、Integration統合)を示す位置にある。

triyāna(三乘)は、L機能(内部的で手段的な、すなわち本質的で当分的な機能要件、Latency潜在性)を示す位置、もしくはG機能(＝外部的で目的的な、すなわち偶有的で真实的な機能要件、Goal-attainment目標達成)の位置にある。

また、三界(traidhātuka)は、A機能(＝外部的で手段的な、すなわち偶有的で当分的な機能要件、Adaptation適応)を示す位置にあり、唯心(citta-matra)はI機能を示す。

なお、「三、道、田環 (kleśa = avidyā-triśnā-upādāna, karma = saṃskāra-bhava, dukkha = viñāna-nāma-rūpa-saḍāyatana-sparśa-vedanā-jāt-jarā-maraṇa) 図を挿入した。

これは十地中、第六現前地の縁起觀中、第五の「三道の隨轉 (tri-vartināuvartana)」による。⁽¹⁶⁾

また、これに対し、これを転ずるに、「三德田環図をもつてした。これは法華教学の精要でもある。⁽¹⁷⁾

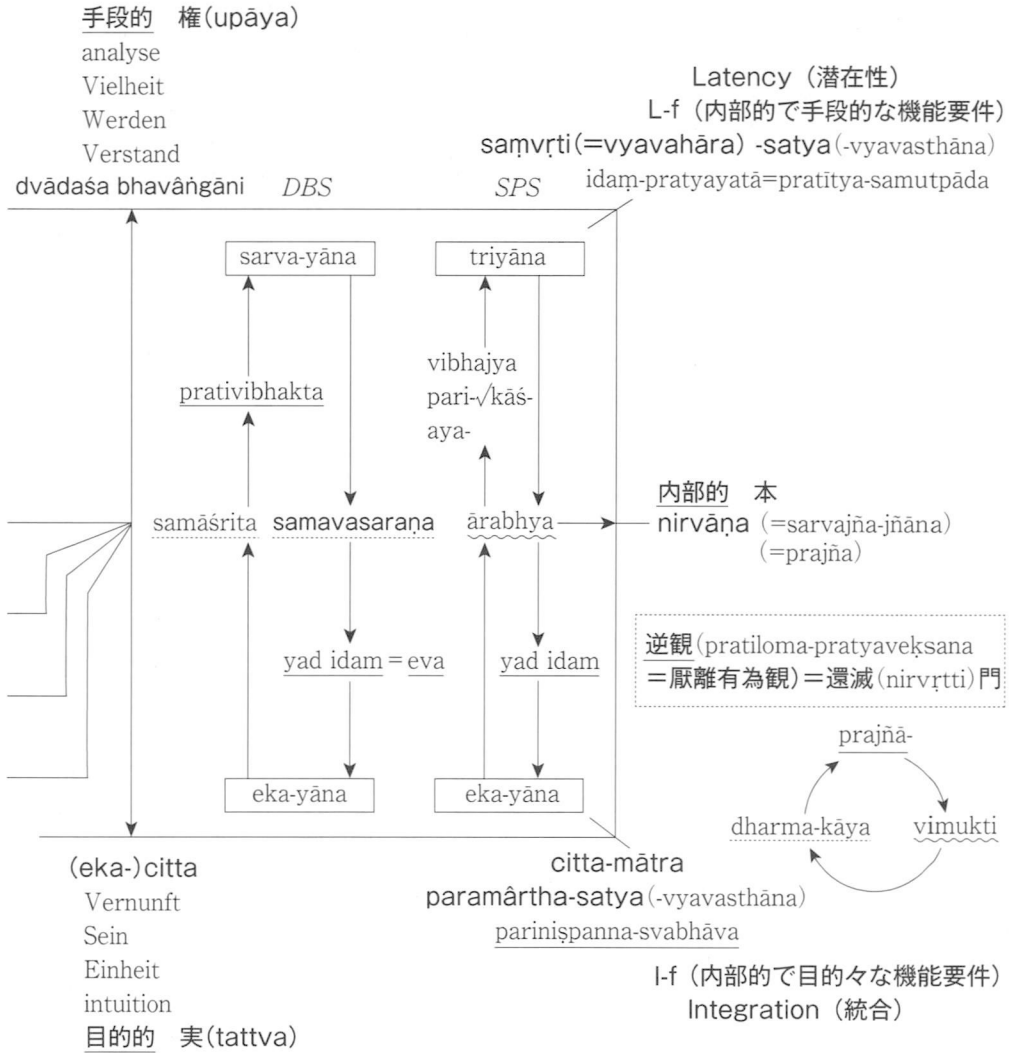
残る問題は何か。実践哲学としての視点からの設問に外ならない。

すなわち、仏教思想の目的合理性(＝皆俱成仏道＝悉皆成仏 sarvabhisambuddha・淨仏国土 buddha-kṣetra-vyūha)にとつて、「三乘各説の構造は各機能において万全か不全か、三乘を含意して止揚しようとする一乘思想は、果たしてその構造において、その機能は万全か不全か、であろう。

それは、仏教古典学として実践哲学 (praktische Philosophie) 上の高等批評学の分野となるであろう。

※ なお、翻訳用語に標準漢訳語を多用すべしとする小生の手法に対して、東北大学名誉教授の村上真完博士より、現代用語をよしとする熱意ある詰問あり。本論文の目的に直接関係しないので、あえて反証しない。

しかし、回避してはならない重要にして興味深い一考を要す



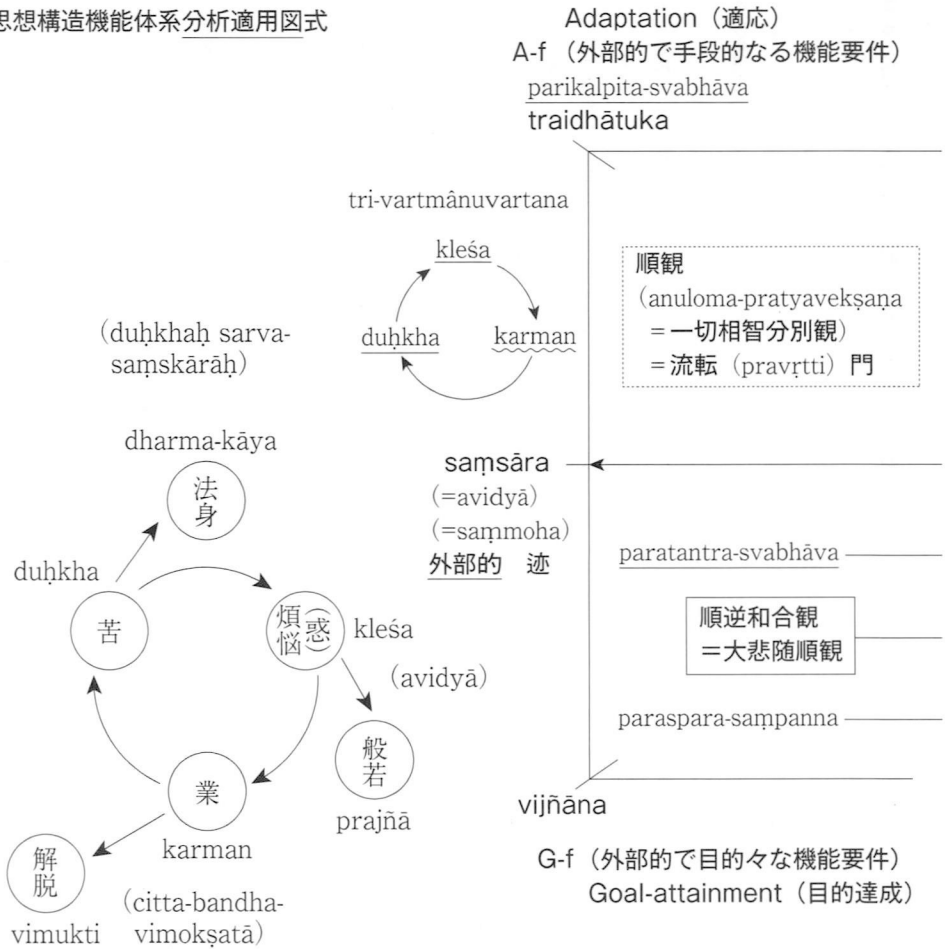
に導かれ (mano-pubbaṅgamā dhammā. Die Dinge haben den Geist zum Führer)、心に続き
りして、苦の彼に随ふこと、車輪の、之を挽けるものの跡に(随ふ)が如し。第二偈(逆
よりして、楽の彼に随ふこと、猶影の(形を)離れざるが如し。(正蔵: Vol.4, p62a)

vyākhyātāni (tāny) api sarvāṇy eva (eka-)citta-samāśritāni.
であるところのもの、それらすべてもまた一心に依るものである)
duḥkha=vijñāna-nāma-rūpa-ṣaḍāyatana-sparśa-vedanā-jāti-jarā-maraṇa) 図を挿入した。
vartana)」による。
る。兄弟抄に云く、心の師とは成るとも、心を師とせざれとは云々。

比較經典学における言語分析手法による構造機能分析 (Structural-Functional-Analysis) の図式 (=パーソンズの AGIL 図式) 化の事例

仏教思想構造機能体系分析適用図式

法華經の一乘思想三乘説に対する構造機能分析 (伊藤)



- ・法句經 *Dhamma-pada* 第一偈 (順観・流転門) に云く、諸法は心 (△意) べられ、心に作らる、(人) 若し汚れたる心を以て、言ひ且つ行はば、其よ観・還滅門) に云く、…… (人) 若し浄き心を以て、言ひ且つ行はば、其
- ・ (paramārtha-satya) citta-mātram idaṃ yad idaṃ traidhātukam.
(この三界に属するものは、すなわち唯心である)
- ・ (saṃvṛti-satya) yānimāni dvādaśa bhavāṅgāni tathāgatena prabhedaśo
(また如来によって分別して演説されたこれら十二有支
なお三道の円環 (kleśa=avidyā-trṣṇā-upādāna, karman=saṃskāra-bhava,
これは十地中、第六現前地の縁起観中、第五の「三道の随転 (tri-vartmānu-
* 止観五) に云く、心と縁と合すれば、則ち三種世間三千の性相皆心より起

る基本問題である。

よって、他日、別論をもって、私見を明示する予定である。

注

- (1) 拙著『仏教の思想と現代(初版本)』(平成二年、隆文館) 二五二頁。
 - (2) 同一五八頁。
 - (3) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』(平成十六年、平楽寺書店) i—vi頁。
 - (4) 拙著『増補 華嚴菩薩道の基礎的研究』(平成二十五年、国書刊行会) 九五頁—六一頁。
 - (5) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』六一九—六四二頁。
 - (6) 拙著『宗教地政学入門』(平成八年、華林山文庫) 二二—二四頁。
- パロソンの構造機能分析については、濱島朗等編『社会学小辞典』(昭和五十六年第九刷、有斐閣) 二二、一〇五、一三七頁の記載が明解である。それを私見により要約すると、左の如くなる。
- ① その基本的な理論は、行為の準拠枠 (action frame of reference)・目標・状況・規範・動機づけの四要素などによる()に基づく、社会に関する機能的要件、(functional requisite) の論理を中核としたシステム分析 (systems analysis) である。
 - ② システム分析とは、特定の単位や実体を他のそれらから分離して、それ自体の性質や特徴を研究するのではなく、むしろそれらの間の相互の関係や組織の状態を分析してシステムを把握することである。
 - ③ システムとは、各構成要素が一定の筋道立った相互連関関係をもちつつ共通の全体目的 (≡ 理念的意趣) に貢献している場合をいう。現実のある側面をある観点から抽象化したモデルでもありうる。
- 構成要素の特性を示す不可変数群とそれらの間の相互関係をもってシステムと定義される。

- ④ 構造機能分析の中核的な理論は、社会システムを目標志向的な体系(システム)として把握することにある。
- ⑤ 機能的要件の分類として代表的な機能要件図式は、パロソズ (Talcoott Parsons 1902-1979) の定式化した AGIL-schema がある。社会システムから行為システム一般に、かつ経験的研究にも適用されている。
- ⑥ A G I L 図式は、外部的と内部的との問題と手段的と目的的問題という二軸によって四体系に区別する。
 - すなわち、A機能 (≡ 外部的で手段的な機能要件、Adaptation 適応)・G機能 (≡ 外部的で目的的な機能要件、Goal-attainment 目標達成)・I機能 (≡ 内部的で目的的な機能要件、Integration 統合)・L機能 (≡ 内部的で手段的な機能要件、Pattern-maintenance パターン維持) または Latency 潜在性) がそれぞれである。
- ⑦ 構造機能分析は、果たして仏教古典学における原典解釈 (≡ 原典説明) 学に適用可能であろうか。
 - これを法華教学に対比すると、外部的は垂迹に内部的は本地に、手段的は権方便に目的的は真実、それぞれ相当する。
- (7) 拙著『増補 華嚴菩薩道の基礎的研究』九七、六九七、七〇八、八三二、八三七、八四一—八四三頁等。
- (8) 拙著『増補 華嚴菩薩道の基礎的研究』六七八—六八〇、七六六—七七一頁等。
- (9) 山口益『般若思想史』五七—六一頁。
- (10) 拙著『仏教の思想と現代』一一〇—一一三頁。
- (11) 同一二五—一三三頁。
- (12) Otto Strauß : *Indische Philosophie*, München, Ernst Reinhardt, 1925, S.254-256. 湯田豊訳『インド哲学』三三七—三四七頁。
- (13) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』五七—九六頁、一七一—二二一頁。
- (14) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』六四五頁。速水滉『論理学』(昭和三十

九年第四十三刷、岩波書店）五八―六六頁。

(15) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』三七―五六頁。

(16) 拙著『増補 華嚴菩薩道の基礎的研究』六八六、七〇一、七一一頁。

(17) 日蓮著『始聞仏乘義』、昭和定本一四五―一五四頁、『十二因縁御書』同上二〇―一五頁。

(初出、仏教思想学会『佛教學』第四七号、平成一七年、山喜房佛書林、これを再治せり)

Summary

A Structural-Functional-Analysis of Eka-yāna and Tri-yāna theories in the Saddharmaṣuṇḍarīkasūtra

Zuiei ITOH

This paper is to attempt an analysis and study of the contents of the *Mahāyāna-sūtra*. In other words, analyzing the structure, the function and the way of thinking, as clearly as possible, is the aim of this paper.

Also the comparative study of *eka-yāna* and *tri-yāna* theories in the *Saddharmaṣuṇḍarīka-sūtra* and the *Daśabhūmika-sūtra*, that I have already studied, and pointed out the similarities and the differences between them. However, the study lacked the consideration of a Structural-Functional Analysis.

Hence, I show diagrams about the structural relationship (= Structural-Functional-Analysis) of the concepts of contents on two sutras in order to clarify the difference of their *eka-yāna* and *tri-yāna* theories.

In conclusion, the present study has suggested that the relationship of the *eka-yāna* and the *tri-yāna* theories are theoretical and abstractive in the *Daśabhūmika-sūtra*, however, is practical and concrete in the *Saddharmaṣuṇḍarīka-sūtra*. Moreover, it implies that the *Saddharmaṣuṇḍarīka-sūtra* indicates the precede form and the *Daśabhūmika-sūtra* indicates the succeeding form from the point of view on the history of thought.